

学校自慢

あたたかい学校

柏市立柏第六小学校長 小山 正明



1 はじめに

本校は柏市の中部に位置し、昭和 39 年に豊四季台団地造成に伴い開校した創立 54 年を迎える小学校である。団地への入居者増加に伴い昭和 44 年には児童数が 1,675 名となり、昭和 45 年に柏第七小学校が新設され分離した。その後、団地住民の高齢化が進むことで児童数が減少していった。平成 21 年にはついに児童数が 97 名と 100 名を割る小規模校となったが、学区再編成と団地再開発事業が進み本年度は児童数 437 名にまで回復してきたところである。

2 学校自慢

11 月に「柏六小で他の学校に自慢できることベスト 5 を書いてください。」と子どもたちにアンケートを行った。その結果を紹介する。

第 1 位 あたたかくておいしい給食

柏市の小学校は 42 校あり、数校を除くほとんどの学校は自校給食である。地域の食材をふんだんに取り入れた和食中心（なぜか魚料理が多い）のできたて料理が出る。子どもたちはほとんど残さず食べている。

第 2 位 花がきれい・自然が豊か

柏駅近くの都市部でありながら、様々な植物がある。学校のシンボルの山茶花を始め桜、柿（干し柿）、銀杏、竹林（竹の子）、松、梅、

藤などが広い敷地内のあちこちにある。また、地域の栽培ボランティアの方々が定期的に来校し低学年や栽培委員会の児童と一緒に花壇作りを行い、一年中いろいろな花がいっぱい咲いている。

第 3 位 校庭が広い・楽しい遊具

第 4 位 楽しい行事「さざんか祭り」

「さざんか祭り」では地域の方々に教わった日本の伝統文化である琴、和太鼓、茶道などを披露し、調べた事を発表している。百人一首も盛んで 1 月には全校児童で百人一首集会を行っている。

第 5 位 みんな仲がよい

第 6 位 縦割り遊び・縦割り給食

第 7 位 先生が優しい・信頼できる

第 8 位 優しい人が多い

第 5 位から第 8 位のことは本校の普段の様子を表している。「いつも笑顔でいよう」「自分から挨拶や返事をしよう」「あたたかい言葉遣いをしよう」「みんなで協力しよう」これらを合い言葉に学校が一つになって「あたたかい学校」を実現している。

3 おわりに

本校の教育活動が保護者を含む地域の方々に支えられ着実に遂行できていることに感謝し、これからもあたたかい学校作りを進めていきたい。

提

言

幼児番組の 作り方・考え方

NHKエデュケーショナル
こども幼児部統括部長 ふるや 古屋 みつあき 光昭



ピタゴラスイッチ

1 はじめに

「いないいないばあっ!」「おかあさんといっしょ」「みいつけた!」「にほんごであそぼ」等々、小さいお子さんがいる御家庭ならば、毎日の習慣のように御覧頂いているNHKの幼児番組。これらがどんな考えやねらいで作られているか御存知でしょうか? 私は教育の専門家ではありませんが、入局以来約30年間、幼児番組の制作に関わってきましたので、その立場から幼児番組の作り方を御紹介するとともに、それが教育に携わる皆さんの考える一助になれば幸いです。

2 幼児番組 伝えるための工夫

NHKの幼児番組には、幼児に伝えるための様々な工夫がなされており大きな特徴が二つあります。一点目は、数多くの番組があり、その一つ一つが対象年齢とジャンルに分かれ、それぞれにねらいが設定されていることです。二点目は、対象年齢に向けた表現、対象年齢に伝わりやすい表現が取られていることです。例えば、0～2歳児向けの「いないいないばあっ!」と、2～4歳向けの「おかあさんといっしょ」では、同じ「歯磨き」という生活習慣をテーマにしたコーナーがあっても、「いないいないばあっ!」では歯磨きそのものに興味を抱くような表現、「おかあさんといっしょ」では子どもが真似をしたくなるような表現をとっています。この年齢層の幼児は1歳違うと発達段階が全く異なってくるため、それぞれの番組で対象の子どもの興味や能力

に合った表現、内容にしています。

テレビ番組は感覚的に作っていると思われるかもしれませんが、幼児番組においては制作チームが研究機関や専門家と連携を取り、幼児に対する調査研究を踏まえた上で番組を制作しています。幼児に伝えるためには、まずその対象である幼児を知らねばならない。そのため幼児がテレビをどう観ているか、幼児の認識に対する調査は既に1980年代に行われ、その研究結果が現在の幼児番組に幾つも受け継がれています。各番組は短いコーナーが幾つも集積した形で出来ていますが、これは幼児が集中してテレビを見続けていられる時間が2～3分という研究結果を受けて、数分のコーナーを積み重ねるという番組スタイルが出来上がりました。また、アニメーションの背景画を細かく描かず、真っ白でシンプルな背景にした方がキャラクターの動きに子どもが集中できる、など研究結果を反映した表現が今も用いられています。

3 主体的に観てもらう

更に幼児番組が留意していることの一つに、「主体的に観る」ということがあります。もう少し詳しく言うと、子どもがテレビを受け身で観るのではなく、何らかの参加感を持ってテレビを観る、そのように作り手である我々が仕向けるということです。上記のような様々な工夫で対象の子どもに届くものを作っても、それを一方的に届けるだけで終わるのでなく、何かしら子どもの中に蓄積され、感じ方や考え方、自発的な

動的な行動に現れて欲しいという願いがあります。番組の歌を一緒に歌う、画面に合わせて体操する、番組で紹介した工作を家で作る等はわかりやすい例ですが、そのような具体的な行為のレベルだけでなく、もう少し違うところで子どもの主体性に訴えることが出来ないかを考えて作った番組が「ピタゴラスイッチ」です。

4 「ピタゴラスイッチ」の考え方

「ピタゴラスイッチ」は2002年に始まった「考え方を育てる」番組です。ビー玉が転がってドミノ倒しのように様々な仕掛けが発動していく「ピタゴラ装置」、スーツ姿の男性二人が不思議な動きをする「アルゴリズムたいそう」など、御覧になったことがあるかもしれません。

この番組を立ち上げる際に、対象年齢を4～6歳とすること以外、何をテーマとするかは明確に決まってはいませんでした。私はまず、この年齢の子どもにとって、「面白いこと」とは何だろう、と考えました。アハハと声に出して笑うことだけでなく、この年齢の子どもにも、「知的に面白い＝interesting」ということもあるのではないかと、では自分は今何を面白いと思っているのか、子どもの頃に何を面白いと思っていたか、それらを伝えられないかと考え、挙げてみました。

挙げてしたものの中には、認識の仕方や言葉などの抽象概念、数学的なものもあれば、具体的な事象では「型があるから同じタイヤキが幾つも作れる」「ラッパの音だけで豆腐屋さんが来た事がわかる」など、様々です。それらの中で特にひっかかっていたのが、回転寿司の皿の数え方です。当時私がよく行っていた回転寿司屋さんは、食べた皿の枚数計算がものすごく速かった（今は自動計算ですが、当時は皿の数を1枚1枚数えて会計）。なぜ瞬時に「9皿」などと答えられるのか、店員さんを観察していると、積

み重ねた皿の隣に湯飲みを置いていました。店の湯飲みの高さが皿7枚分ということがわかっていて、それを超える数枚だけを数えれば、すぐに皿の総数がわかる、という仕組みだったのです。つまり、身近なものを使って独自の単位・ものさし（1湯飲み＝7皿高）を使っていた、ということなのですが、この仕組みに気づいた時、自分が「面白い」と思うのはこういうことで、何か個別の教科やジャンルということではない、とはっきりしました。では先に列挙したようなタイヤキやお豆腐屋さんの事例を含めてこうした面白い構造やルールを何と呼ぶのか、他人に説明するためにも何か括る言葉が必要になります。そこでこれらを「考え方」という言葉でまとめ、「考え方」をテーマにした番組にしよう、と決めました。

5 問題を発見する力・考える力

その後、番組のブレインでもある慶応大学の佐藤雅彦教授とも討議を重ね、番組の体裁を整えていくとともに、番組を見た子どもがどんなふうになって欲しいかを話し合いました。その結果は、「問題を発見する力」が育って欲しい、です。上記の回転寿司の例で言えば、そもそも何故計算が速いのかという問題に気づき、観察し考え、その謎を解く、というプロセスを子どもにも感じて欲しい、そのためのコーナーが「ピタゴラスイッチ」には幾つも仕掛けてあります。「問題を発見する力」は、疑問に感じる心、何故を感じる力でもあり、昨今よく言われる「考える力」であると思います。

幼児に伝えるという観点で番組の作り方を紹介してきましたが、授業という他人に何かを伝える行為と、類似点が幾つもあるように思います。何かの一助になれば幸いです。

〔略歴〕

1989年 NHK入局。2002年「ピタゴラスイッチ」を開発。

「おかあさんといっしょ」「母と子のテレビ絵本」など、入局以来、幼児番組を中心に担当。